

Raffine Journal vol.20

澄んだ表現

澄んでいる、と思った。
歌もダンスも、濁りがない。

透明というより、
磨かれたガラスのような澄みだった。

あるパフォーマンスを見ていて、
そう思った。

歌もダンスも、見ていて気持ちがいい。

それは、技術の問題ではなかった。

表現には、ときどき
わずかな揺れが現れる。

感情の滲み。
呼吸の揺れ。

ほんの小さな差が、
空気を変える。

見ていて感じたのは、
静かな澄みだった。

強く押し出すわけでもなく、
感情を大きく乗せるわけでもない。

それでも、存在は消えない。

静かに、芯がある。

表現には、
内側がそのまま現れる。

迷い。
感情の濁り。
呼吸の揺れ。

それは小さい。

けれど、確かに空気を変える。

この表現には、
揺れがほとんどなかった。

感情の質が揺れない。
呼吸の質が変わらない。

表現の密度が、
ずっと同じまま続いている。

表現は、
その人の状態を映す。

身体の動きや声だけではなく、
内側の在り方まで現れる。

表現の揺れは、
内側の揺れの形である。

揺れが現れないとき、
内側の状態は、すでに整っている。

揺れが、現れない。

Raffiné Journal vol.20
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné